

＜北海道熊研究会 会報＞ 第67号 2017年 6月 20日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～66号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

北海道野生動物研究所では、2013年以来、東京水産大学出身で、野生動物学者で写真家の稗田一俊氏と共同で、知床ルシャ川・テッパンベツ川両河口域で、熊 U.arctos に関する事象に関し調査研究を行っている。以下に2016年3月に作成した3ヶ年間(2013年、2014年、2015年)の結果を総括した報文を、順次公表しますので、ご覧下さい。今般はその第1報です。

＜第1報＞

＜報告書 知床調査＞

2016年 3月 13日

ルシャ川・テッパンベツ川 両河口域での  
3カ年間(2013年、2014年、2015年)の熊 U.arctos に関する調査報告

調査者及び報告書著者

北海道野生動物研究所

所長 農学博士 獣医学修士 門崎 允昭

研究所 主幹 稗田 一俊

研究所 主幹 PETER NICHOLS

【要 旨】

＜調査目的＞ 当該地は熊の恒常的出没地であり、19号番屋があり、漁期には10数人の者が暮らし屋外で長時間労働しているが、人身事故が生じていない。そこで、番屋住人の熊に対する対応、その場合の熊の反応を実見し、「人と熊が共存する為の策」を見出す資料とするために、当該地の熊に関するあらゆる事象について、調査する事が目的である。

＜調査地＞ 調査地は通称「ルシャ・テッパンベツ川河口域」と称する地域で、知床林道が標高20mの海岸に至った地点(西端)から、東端は19号番屋に至る間の東西約2.8kmの区間の潮際から山側標高20m迄の間と、これらの場所から眺望し得る山側斜面一帯である。

<調査時期と方法> 調査は、2013年10月から2015年10月の間の、7期実施、各期の調査日数は4日間である。調査は目視(裸眼と双眼鏡)で為し、調査時間帯は、日の出後から日没前の時間帯である。

<結果及び論議結論>

<1> 3ヶ年間に当該地で確認した熊は個体識別し、重複個体を除いて、母子13組総頭数37頭と単独個体の総頭数が20頭で、両者合わせた総頭数は57頭であった。

<2> 当該地域に熊が恒常的に出て来る理由は、調査の結果、①当該地には熊の食料となる餌資源がある事。②この地所での銃殺が、1989年に1頭を銃殺して以来、行われていない為に、熊が当該地に対して安心感を懐いている事。③眺望が利き、熊同士の遭遇を予防し得る事。の3要因が満たされている為である。特に、③の要因が、当該地に、母子と当年母から自立した若熊と前年母から自立した満2歳代の個体が来ている主因である事が看取された。母熊はここを育子と子に生活の術を教授する場として活用している事が看取された。また、当年と前年母から自立した1歳代と2歳代の個体が、しばしの安住の地として、索餌採餌の場として利用していることが看取された。2歳以上の単独個体の累計は20頭であったが、いずれも索餌採餌、とりわけ鮭鱒目的に来たものだが、母子が採餌している場合は、それを了解し、邪魔しないように行動している様子が、明らかに観て取れ、熊社会の暗黙の秩序の存在が看取された。母熊が連れていた子の数について言えば、1子の場合が2組、2子の場合が11組で、2子の場合が、1子の5.5倍と高率で、当該地では子の数が2子の場合が、明らかに多いと言える。また、当該地では、子が満1歳過ぎた5月から8月の間に子を自立させていた。鮭鱒を食べていない地域の場合、母が連れてくる子が2子の場合、子が満2歳を過ぎた5月から8月の間に子を自立させるのが通例であり、当該地は鮭鱒を捕食し得る事で、子の成長が早く、子育てに適した場所である事が看取された。

<3> 当該地での人への熊の対応は、次の6型が観察された。

① 熊は人に遭遇しないように、注意しながら、気を使って行動している。② 人が来たら、出会わないように、他所に移動する。ゆっくり離れて行く場合と急いで走り去る場合とがある。③ 人が来たら、その場で、しばらく、人の様子をうかがう(観察する)。この際、立ち上がることもある(視線を高くし、よく観察するためである)。④ 少し近づいて来る事もある→そして、立ち止まり、人の様子を窺う。なかなか、離れていかない場合もある。母子の場合、人や車に近づいて来ることもある。これは、子熊に人や車を教える為と、門崎は解している。さらに、稗田は、母熊のこの行動を、母熊が他の熊から子を守るために、人を楯に利用しているとの見方をし、そのために、母熊がこの人は大丈夫と判断した人に対して、我が子であることを教える行動でもあると捉えている。⑤ 前記③④の後、離れていく、この場合、瞬時に身をひるがえす場合と、ゆっくり離れて行く場合とがある。⑥ 人と熊の距離が10数m離れていれば、熊は平気でその場に居て、その場から離れようとしなないことがある。

(了)